様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０４３８

研究課題名（和文）日本語従属節の、意味論・語用論的研究

研究課題名（英文）Sematic and Pragmatic Studies in Japanese Subordinate Clauses

研究代表者
橋本　修（HASHIMOTO, Osamu）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：３０２５０９９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：現代日本語、古典日本語の従属節の性質のうち、主として「現代日本語の従属節のテンス基準時が、標準的とされる発話時・主節時以外にも数種あること、その一方で、基準時とすることを疑う先行研究もある中、主節時の基準時としてのステイタスが一定レベルで存すること」「現代日本語のトキに関する名詞的節の少なくとも一部が、内の関係・外の関係という図式ではとらえきれないこと」「従属節をとる抽象名詞の性質が、語彙的に3種に分かれること」「古典日本語における現実・非現実を反映する形態的対立が、一部連体修飾節においては中和すること」を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Regarding the properties of the subordinate clauses of modern Japanese and classical Japanese, we mainly revealed as follows; "There are several types except when the tense reference time of the subordinate clause of modern Japanese is standardized at the utterance time and main clause time","On the other hand in the previous research which suspects that it is the reference time, the status as the reference time at the main clause exists at a certain level" "At least part of the noun clause concerning time in modern Japanese is not suitable for classification related to internal relations ; Things that can not be caught in the diagram of internal/external modification "," The nature of abstract nouns that take subordinate clauses is lexically divided into three types. "," The morphological oppsition that reflects the realis or irrealis in classical Japanese can be neutralized in the some kind of noun-modification clause ".

研究分野：日本語学　言語学

キーワード：従属節　複文　テンス　名詞修飾　連体修飾　抽象名詞

１．研究開始当初の背景

日本語従属節の分析については、節サイズや透明性を中心とした統語分析については安定した解明が進んでいたものの、意味論・語用論の領域については、解明すべき点が多々残されていた。特に従属節のテンスの問題、単文構文における類型との相同と異なりという問題について、問題点の指摘のみで解明が進んでいない課題、および問題点自体が十分に把握されていない課題が、現代日本語、古典日本語の双方に多く残されている状況であった。

また、隣接領域である国語教育・日本語教育の領域で、主に作文研究に結びつく、従属節をもつ複文についての研究が求められている状況もあった。

２．研究の目的

主な目的は以下の点である。

（１）従属節のテンス現象について、古典語・現代日本語双方において意味論・語用論的検討を行う。従来の「アスペクト説」「不定形説」「視点の原理説」等が一部妥当である一方、一部は確実に不十分であるという見通しがあり、諸説を批判的に検討し、コーパス・内省等により新しい説明のシステムを構築する。

（２）（平安時代を中心とする）古典日本語従属節の述部形態について、realis／irrealis の表示が中和する境界を画定する等、テンス・モダリティの性質を解明する。

（３）主として現代日本語名詞修飾節の叙述性について検討する。この検討は、国語教育・日本語教育における日本語作文に対する基礎的な基礎研究ともなる。

（４）英語等他言語との対照により、日本語従属節の、内部徴証による解明以外の解明を行う。これに関連して、類似の出来事を指す従属節が、状況により異なる構文タイプで出現するという現象について検討する。

３．研究の方法

初年度を中心とする初期においては、必要な先行研究の批判的検討、内省情報の収集、コーパスの収集および部分的作成、本研究の目的に見合った形でのコーパス加工を行った。コーパスの収集・加工については短期雇用者による作業も含まれる。

中期以降は上記の作業を元に理論的検討を行いそれぞれの目的に即して理論構築、説明のメカニズムの精緻化、問題点の改善・修正を行った。

４．研究成果

（１）従属節のテンス現象

（１－１）先行研究の整理を行い、以下の点を明らかにした。まず、先行研究の知見について整理し、

・1970 年代まで、先行研究において相対テンス／絶対テンスの区別という意識は薄く、わずかに「過去の助動詞に過去をあらわさない用法がある」という記述が断片的に見られる、という状況である。

・1970 年代以降、一部の研究が、相対テンスを標準とする取り扱いを行うようになる。一方で、標準的な解釈が当てはまらないケースについては、「時制の一致」として処理しようとするが、現在まで適切な解決には至っていない。

・徐々に従属節テンスを「絶対テンス」「相対テンス」に二分し、「絶対テンス」の基準時を発話時、相対テンスの基準時を「主節の出来事時」とする標準モデルが採用されるようになり、現在に至っている。

ということを明らかにした。

（１－２）

従属節テンスのうち相対テンスについて、その基準時が主節の出来事時であるという前提について批判的検討を行った。現在標準的とされる先行研究の多くが従属節テンスについて「絶対テンス／相対テンス」「すなわち発話時基準／主節時基準」枠組みを採用するが、データの採取・理論的検討により、このうち、「相対テンスの基準時が唯一的に主節時（主節の出来事時）である」という点に問題があるという点を明らかにした。

具体的には、引用節・内容補充連体修飾節・相対補充連体修飾節においては、主節時を基準としない（しかも発話時基準でもない）例が明確に存在することを明らかにした。

（１－３）

上記以外の、主節時でも発話時でもない基準点として働きうる時点として副詞節の一部で問題にされている「（主節事態の認識時）」について検討し、「確例がル形節に限られ、かつ状態性に関して中和が起きている可能性を否定できない」ことを示し、狭義の相対テンスにおける基準点ではないことを明らかにした。一方で、「状態性の中和が起きていることをテンスアスペクトシステムの中で連続的・整合的に位置付け、解釈できるような理論的進展があった際には、レベルは異なるが、上記以外の基準時としてのステイタスを得る可能性があることを示し、その際には「従属節・主節事態近接型ル形連体修飾節」「ル形継起のト節」「一部の副詞節（ル形同時解釈の場合のみ相対テンスが可能であるといわれている節）に対しても適用可能であることを明らかにした。

（１－４）

上記を踏まえ相対テンスの基準時の可動域について全体的に検討し、

・主節時以外の基準点を取る相対テンスの出

現環境が引用節・内容補充連体修飾節・相対補充連体修飾節に限られるのは、これらが時間軸上の有標点を持つ（引用節・内容補充連体修飾節においては「描かれた世界の現在時」、相対補充連体修飾節においては「主名詞時」というそれぞれに内在的な有標点が想定可能である一方、内の関係の連体修飾節・副詞節においては時間軸上の有標点が存在しない）ためであること。
・相対テンスの基準時として、主節時を一切認めないという逆方向に過激な立場に対しては、主節が存在することによって成り立っている従属節テンスの対立がある（同じ意味をあらわす節が、主節を持つ場合にのみ許容されるケースがある）ことから穏当でなということ
をそれぞれ明らかにした。

（２）古典語従属節のテンス・モダリティ
　先行研究、コーパスデータの検討を行い、古典語の従属節述部が、主節と同様、現代日本語に比べ realis／irrealis の対立に敏感であることを確認した。一方で、一定以下のサイズの節（ex.絶対存在文をなす「～するものなし」「～せむものなし」等）においては、上記対立が中和するという現象も明らかにした。

（３）現代日本名詞修飾句の叙述性

（３－１）内容補充連体修飾節を受ける抽象が主題となった場合に、「S こと」という述部によって措定文が作成できるケース（ex.「この薬品の特徴は水にも油にも溶けることです」）と、作成できないケース（「この薬品の性質は水にも油にも溶けることです（不自然）」のあることを明らかにした。

（３－２）上記の２つのケースが、概ね被修飾名詞の語彙によって分かれることを内省・アンケート調査によって明らかにし、教育との関わりで、具体的な語彙リストを作成した。また、従属節の複雑さとリーダビリティ（文の難易度）には一定の相関があることを確認し、その上で、コーパスデータを用いた調査により、形容詞節による修飾を含む節より動詞を含む節による修飾のほうが文の難易度を上げる効果の高いことを明らかにした。

（４）他言語との対照・構文間の対照
　現代日本語連体修飾節について、英語分詞構文、日本語連用修飾節と比較しながら、出現に関する分布状況の特徴の一端を明らかにした。
　また、従属節を比較する際の尺度としては「節のサイズ」「主節に対する高さ」「接点の堅さ」の 3 点が有効であることを、先行研究との関わりで明らかにした。先行研究においては「節の主節に対する従属度」という概念が用いられることが相当数あるが、上記はさらに本研究の提示する 3 つの尺度概念に分ける必要があることを示した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）
①橋本修・安部朋世・関口雄基 2017「学習用国語辞典の語釈の難易度をめぐって」『国語科教育研究』133,pp.74-77,2017 年 10 月、査読有

②大島資生 2017「翻訳文における情報提示の順序について－日本語連体修飾節と英語関係節の対照から－」『人文学報』513-11 首都大学東京大学院人文科学研究科、pp.1～29 2017 年 3 月、査読有

③橋本修 2016「リーダビリティとことばの教育」『韓国日本言語文化学会 2016 年度春季国際学術大会発表論文集』、ppp.22-27、2016 年 5 月、査読有

④橋本修 2015「内容節のテンス解釈について－非発話時基準を中心に－」『日本言語文化』第 31 輯、pp.7-22、2015 年 6 月、査読有

⑤大島資生 2015「現代日本語における形容詞連用形・テ形の機能について」『人文学報』507 、pp.1～18 2015 年 3 月、査読有

〔学会発表〕（計　７件）
①橋本修 2017「「ときがある」とその周辺」『2017 年度日中韓日本言語文化に関する国際学術シンポジウム』2017 年 10 月、査読有

②橋本修・安部朋世・関口雄基 2017「学習用国語辞典の語釈の難易度をめぐって」『全国大学国語教育学会』2017 年度福山大会、2017 年 10 月、査読有

③橋本修 2017「主要部の性質と従属節のトキ解釈」『第九届漢日対比語言学検討会』2017 年 10 月、査読有

④大島資生 2016「日本語の相対名詞連体修飾の統語的特性について」『国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾構文の対照研究」』平成 28 年度 第 2 回研究発表会 2016 年 11 月、査読有

⑤橋本修 2016「相対テンスかアスペクトか」韓国日本言語文化学会 2016 年度秋季国際学術大会、2016 年 10 月、査読有

⑥橋本修・安部朋世 2016 「作文の言語的評価とリーダビリティ」全国大学国語教育学会

第 131 回大会、2016 年 10 月

⑦橋本修 2016「従属節における現実／非現実」
『大連大学第七回　中・日・韓日本言語文化研究国際フォーラム』、2016 年 9 月、査読有

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本　修（HASHIMOTO,Osamu）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：30250997

(2)研究分担者
大島　資生（OOSHIMA,Mtoo）
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号： 30213705